

運動が苦手な生徒の運動技能を向上させるための指導の在り方 — 中学校・器械運動の授業を対象に —

深見英一郎¹⁾、水島宏一²⁾、友添秀則¹⁾、吉永武史¹⁾

¹⁾早稲田大学スポーツ科学学術院

²⁾東京学芸大学教育学部健康・スポーツ系

キーワード: 運動が苦手な生徒、運動技能、指導、器械運動

【抄 録】

本研究では、生徒の運動能力差が顕著に現れやすく、学習意欲を減退させやすい器械運動の授業を対象に、運動技能の低い生徒に焦点を当てて研究を行った。ここでは、運動の苦手な生徒がどのような運動課題に取り組み、先生や友達とどのような関わりがみられるのか、その実態を分析した。また、どのような学習環境を設定すれば、運動の苦手な生徒が運動技能を向上させることができるのかを明らかにしようとした。対象は、中学1年生男子2クラスならびにその中の運動が苦手な生徒8名であった。単元後の運動スキルテストの結果、技能上位群、中位群、下位群すべての生徒たちの得点が向上し、なかでも下位群の伸びが最も大きかった。一方で、生徒の運動有能感は技能上位群だけが向上し、技能中位群、下位群は向上しなかった。なぜそのような結果が示されたのか、運動課題、先生の関わり、友達の関わりの3視点から分析した。

その結果、運動が苦手な生徒に対して、運動課題は通常の場合ではなく、彼らの能力に見合った工夫された場で課題に取り組ませること、そのためには先生が易しい場や補助具を活用した場で取り組むように積極的に働きかけることの重要性が示唆された。また、運動が苦手な生徒は、上手な生徒たちと比較して、先生及び友達からの役に立つ声かけの回数が少なかった。授業中の先生の役に立つ助言が友達との協力的学習につながったり先生の助言内容が友達同士の教え合いの内容に反映されたりする可能性が示唆されていることから、授業中、先生は積極的に助言や賞賛を与える必要がある。運動が苦手な生徒たちに対する先生からの役に立つ声かけが少なかったのは、彼らのパフォーマンスの成功回数の少なさやその質の低さが主な要因であることは否めないが、それ以上に目の前でつまづいている運動が苦手な生徒に対して、先生が問題解決するための手立てが見つけれず、どのように関わればよいかかわからなかったからであると推察された。この点について、当然、専門としない運動領域を指導することの困難さは理解できるが、やはり先生自身が器械運動の指導法を学び、指導力を向上させる必要があると考えられる。

また、今回、授業中、上手な生徒とそうでない生徒がお互いに協力して学習に取り組めるように異質グループを作ってグループ単位での活動に取り組ませたが、意図していたような生徒間での関わり合いはほとんど確認されなかった。このことから、異質グループを作り活動時間を設定すれば自動的に生徒同士の関わり合いが生まれるわけではなく、そこではグループ内で生徒同士がお互いに見合い、教え合い学習に積極的に参加するように、先生による意図的で粘り強い働きかけが必要であることが示唆された。

スポーツ科学研究, 12, 56-73, 2015年, 受付日: 2015年4月2日, 受理日: 2015年7月19日

連絡先: 深見英一郎 早稲田大学スポーツ科学学術院 〒359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島 2-579-15

E-mail: eiichiro@waseda.jp